

# 中川根ふる里通信

= 第 93 号 =

中川根ふる里通信  
 昭和61年4月20日創刊  
 編集・発行・連絡先  
 静岡県榛原郡川根本町上長尾859  
 TEL. 0547-56-0015  
 FAX. 0547-56-0020  
 郵便振替口座 00870-4-81556

<http://furusatotsushin.yamanoha.com/>

重要無形民俗文化財

## 徳山の盆踊



8月15日、徳山愛宕地蔵堂にて「ヒヤイ」ヒビ舞  
 タオゴロ、浅間神社まで道行き巡行の様子

ふる里には遠い昔から脈々と受継がれて来たる素晴らしい有形・無形の文化財が数多くあります。それらを順を追ってご紹介いたします。

### 第一回目 重要無形民俗文化財

#### 徳山の盆踊 指定日 昭和62年12月28日

毎年8月15日、浅間神社の祭典当日、神社境内の特設舞台上で奉納されます徳山の盆踊は、「鹿ん舞」「ヒーヤイ」「狂言」という全く異なった芸能で構成されており、いわば三位一体の形態が特徴となっています。

祭典当日は昼から鹿ん舞が地区内を巡り、15時30分に関係者全員が頭屋に集合します。頭屋はかつては大構えの家や、新築・祝言等に当る家が申し出ていましたが、近年は徳山区コミュニティ防災センターが多い様です。17時から神事をおこない、ヒーヤイの「神すずしめ」を一舞し、頭屋を出発。古式懐かしい道行が、始まりです。途中愛宕地蔵堂で鹿ん舞・ヒーヤイを奉納し、18時50分頃神社に着きます。



まず露払い(左上写真)と神輿が宮入り

次にヒーヤイの「神よせ・打ち込み・四節踊」の歌を奉納してから、ヒーヤイ・狂言の一回が舞台上上ります。ヒーヤイ・狂言の演じられる合間に数回鹿ん舞が舞台上のまわりを回りながら踊り、最後に踊り手全員で「ひきは」を踊り、浅間神社での奉納は終了します。

その後、愛宕地蔵堂におもむき、「神すずしめ」を一舞奉納して、徳山の盆踊は終了します。

次に、各芸能の説明をします。

#### ★鹿ん舞

鹿ん舞は露払い・神輿・雄鹿一頭・雌鹿二頭・百姓役数人・囃子方の二団で構成されます。露払いには長い青竹の両側に茅の束を付けた物を担ぎ、うねりながら人垣を分け、神輿が後に続きます。

鹿の一行は雄鹿・雌鹿とも張り子の白い鹿の頭を被り、両手には綾棒という白地に赤色の帯を螺旋に巻いた杖を操ります。この棒はヒーヤイの踊にも使われており、地を突く槌は呪術を感じさせます。杖をくるくる手前で回して飛び跳ね、進む時には前回り、後退する時には後ろ回り、止まると鹿の前足のようになり杖を立て、周囲左右を伺うと(左写真)「ソーリヤー・ウンハイ」と叫んで疾走します。鹿の後を追う百姓役たちはひらりとこの面を背中につけ、鹿と同じ動作をし、その後には囃子方が続きます。

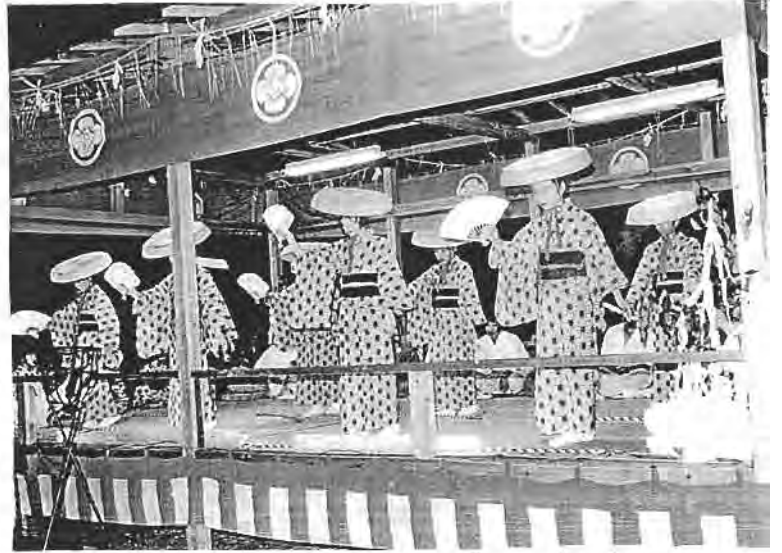
かつては、成人を迎える男子が舞っており、荒々しい鹿が演じられましたが、現在は中学生が演ずる初々しい若鹿が舞を披露するとともに、ヒーヤイ・狂言の警護をする役目ももっています。

#### ★ヒーヤイ

ヒーヤイとは、芸能の中で「ヒーヤイ」という囃子言葉がよく出てくるのが語源です。

ヒーヤイは「その形態が風流小歌踊と、古歌舞伎踊の初期の仕組みを伝承するもので、わが国の芸能史上価値ある無形の国宝ともいえる芸能である」と評価されており、徳





山の盆踊の主演といえます。演目には、四節踊・ひきは・神よせ・神すずしめ・桜花・牡丹・かほちや踊の七演目があります。四節踊・ひきは踊は風流小歌踊に属し、歌の初めに「こりや何踊・こりや何踊、〇〇踊と踊るよう」で始まり、終りは「〇〇踊はこれまで、これまで」の歌詞が特徴です。かつて踊られていた花の踊・御若衆踊・稜の踊・越前踊も風流小歌踊に属しており、したがって現在は歌詞のみが伝承されています。

神よせ・神すずしめ・桜花・牡丹は古歌異伎踊に属し、「出端の歌」「当世風の小歌」「入端の歌」で構成され、特に「入端の歌」の「いざや帰らんしゃならしゃなら」と「もどれやしゃならしゃなら」となどの歌詞が古歌異伎踊の特徴をあらわしています。いでたちは、麻の葉模様の浴衣に黒い垂らし帯を締め、菅笠をかぶり、扇子と綾棒を手に操るさまは、古風な女歌異伎踊に通ずるものがあります。(写真参照、麻の葉模様の群青色) かほちや踊は、小歌踊・古歌異伎踊とは別の、東海道旅歌踊で、ひきは踊の前に踊られます。

ヒーヤイは、昔からずっと男が女装して踊っていました。昭和三十二年頃から女子が踊ることになり、初めは、18歳の未婚の娘さんが、昭和38年頃から中学生が、昭和58年からは小学4年生以上が参加しています。



### ★ 狂言

狂言は、ヒーヤイと同じ舞臺で演じられます。

狂言の台本も古いものが保存されている事でも貴重な文化財といえます。

慶応四年(一八八六明治元年)の台本に「むかしより猿樂とやら口うつし、おぼえしたき書き、しおくぞや」とあり、また一番古い台本には、宝暦九年卯七月(一七五九)と墨書きされています。

台本に残されている演目は、

能狂言風と、地狂言風に分けられ、いずれも古い狂言の姿を伝えています。

能狂言風に属するものは百姓狂言・花折狂言・こんかい・源氏・富士松・こんぶ売り・廿我大名・こくうり・笠寺・千代房・頼光の演目があります。

地狂言風に属するものに、古曾我・新曾我・家番の演目があります。

昭和23年頃まではこれらの狂言14番全てが演じられていたが、現在は、「頼光」「新曾我」だけが演じられています。

徳山の盆踊の伝承について、明治25年5月に作られた「神社伝来旧式調書」には次の事が書かれています。

『猿樂踊式は毎年陰曆七月十五日、兩社(浅間・御嶽)の例祭の夜行なう。祭典終了後直ちに行なう。内容は「演奏」



「踊り歌」「踊り」「狂言」の方法が書かれ、踊式が終ると、同夜直ちに正島の八幡宮におもむき踊式を執行した」とあります。現在伝承されている「ヒヤイ」「狂言」がこの猿樂踊式から続けられていることがわかります。陰暦七月十五日は現在の九月ごろ、秋のはじめで、月も満月夜通し踊式がくりひろげられたさまが想像されます。

一方「鹿ん舞」の起源については詳らかではありません。一説によると、鹿など野性動物と里人との関わりを表わした焼畑文化の象徴ともいえる貴重な芸能で、昔は、大井川河原や原っぱなど広い場所で、盛んに舞われていたのではないかとはいわれています。

徳山の盆踊の奉納される神社にも特筆すべきことがあります。川根町史資料編によりますと、この地に最初に祀られたのは御嶽神社で創建は仁和三年(八八七)と、徳山地で最古の神社です。次に寛文六年(一六六六)合祀された浅間神社は、創建は天正三年(一五七五)と、新しく、町を見下ろす浅間山から里に降りて来て、浅間御嶽相殿とあります。時代も明治に入り、寺社統廃合令のもと、村内の神社の多くがこの地に統合、合祀されました。明治八年四月に浅間神社として登記され、社格は郷社となりました。明治十年三月に地区最大の八幡神社が合祀されます。昔は八幡宮といひ、正島の宮ノ腰に鎮座し、創建は天喜三年(一〇五五)八月十五日土岐山城守建立とされており、この時から浅間・御嶽・八幡三社相殿にあわせ、子之神社・愛宕・大井・諏訪・稻荷・夕宮・若宮・三輪の八神社が、合祀され、境内神社八社を合わせると、浅間神社には十九の神社が鎮座しております。先に述べました「鹿ん舞」「ヒヤイ」「狂言」の三位一体の芸能が、各神社からの芸能ではあるまいかと想像するとともに、徳山の祖土岐氏と、千年を越える徳山地の歴史が一本の糸で繋がります。

この素晴らしい文化の伝承者、「徳山古典芸能保存会」の皆さんに、エールを贈るとともに、川根本町のほろる宝物を、皆さんで、温めていきたいですね。

### 最新 ニューズ

川根本町町議会議員補欠選挙が四月十五日に行われ、次の方々が当選されました。紹介致します。

- ★中村 優さん 七十四歳 千頭地区
- ★久野 孝史さん 六十二歳 高郷地区
- ★長塚 誠さん 六十歳 高郷地区
- ★芹澤 広行さん 六十二歳 小長井地区
- ★中澤 荘也さん 六十歳 地名地区

任期途中の町議会議員が五人辞職したため、町選挙管理委員会は、補欠選挙を告示し、七人が立候補され、投票のは、いびとなりまりました。当選された皆さん、おめでとございます。一刻も早く議会運営が正常化に、成るよう、頑張ってください。

次に、92号にて紹介しました、町をゆるがす情報通信基盤整備事業。その混乱ぶり、状況紹介の続きをします。町民ネットワークに、たまたま提出した川根本町、町長・町議会議員のダブルコールの署名簿の有効が決まり、3月18日のリコール投票に向けて、川根本町はかつて経験したことのない未知の世界に突入していきました。

②光るパー事業に反対した五人の議員の内四人が、リコールが不成立の場合、次の選挙には出ない事を表明しました。その後、議員辞職を提出するも、町も議会も年度末の重要な時期の為、すぐに止めるわけにはいきませんでした。が、後に辞表は受理され、議会は、歯のぬけに様になりました。

③リコールに向けて、町長の言い分、残った議員の言い分、辞職議員の言い分、こたえ新聞、やまびこのチラシ、個人のチラシ

投票区及び場所	投票率 リコール	投票率 補選
1 奥泉	78.32	69.54
2 総合支所(千頭)	76.42	68.84
3 文化会館(川根井)	73.86	70.11
4 田代	76.71	70.16
5 崎平	77.88	70.21
6 元蔭川	70.82	65.73
7 町投票(上長尾)	66.73	56.42
8 南部小(下長尾)	62.76	50.16
9 久野脇	69.93	60.00
10 地名	63.77	67.86
11 徳山	62.56	44.42
全体 単位%	68.94	59.69

など新聞折込に入れられ、何回となくリコールの賛否の呼びかけがなされましたが、中には、的外れな文章もあって、困惑した次第です。勢望等並たなと、感じました。やり方もくばられました。

② 2月28日リコールの期日前投票が始まりました。期間も長く、国勢望等並たなと、感じました。やり方もくばられました。

③ 3月18日、リコール投票日。その結果は、

- 町長 賛成ニ、四四九 反対ニ、二七二七 リコール否決
- 町議 賛成ニ、三九六 反対ニ、四六二 リコール否決

この結果により、佐藤公敏町長は、町長職を信認され、新たな年度の町づくりに邁進することになりました。町会議員の方は、反対票がわずかに66票多かっただけの近差の否決となりました。そして、私事により辞職した議員を合わせて、五人の町議会議員の補欠選挙投票日が発せられました。4月8日、補欠選挙戦に突入しました。遊説も少なく、候補宣伝カーも見つけられず、外目には静かな選挙戦となりました。最後に、県下でも優れた投票率を残す川根本町ですが、低調でも左表の結果となりました。町民も充分参加したのではないかと思われます。一年をこえた混乱もこれまで、これまでに。

※ 上記のうちで、第7投票区(上長尾・高郷・梅高・八中・木川・田野口地区)と、第11投票区(徳山地区)は、川根本町の大部分で、全体の率が左右されます。有権者数は7,090人(男3,488、女3,602)全国平均より男女の差が少ないのも特徴です。

### 千頭山国有林と千頭森林鉄道

寸又川一帯は豊かな森林に恵まれ、昔から林業が盛んな所です。その地の全てが川根本町内に有ることもあり、ご紹介致します。寸又川流域は豊かな降雨量と地質に恵まれて、約二六、〇〇〇ヘクタールの大森林地帯となっております。地域をとり囲む二、〇〇〇ヘクタール以上の山々は、大無間山三、三九九九、光岳三、五九一、中ノ尾根山三、三九六、不動岳三、一七二、黒法師岳三、〇六七など、十二峰を教え、静岡市・長野県・浜松市と境を接し、その内部一帯が、国の財産である千頭山国有林です。まず国有林の歴史をひもといてみます。

江戸時代では徳川幕府直轄の御林で、慶長19年(一六四四)駿府城用材として、松・梅・檜などの木材がきり出されたこと伝えられています。元禄15年(一七〇二)に、井川村と千頭村との間に境をめぐる争いが起こり、最後には千頭村の言い分が通りました。その時の約束事として、御林を山の上方の40%が御立山(徳川幕府直轄山林)、下の60%が百姓山(村ごとりしり、村人が利用する山林)となり、百姓山の20%は、白

よけ林・風よけ林として、御立山とあわせ、代官がおさめていたやうです。その後、江戸・上野の寛永寺や江戸城、京都御所などの用材の調達に、紀国屋文左衛門など沢山の商人が、この山に入り、盛んに木が伐り出され、伐り出された木は、大井川の下流や海までいっぱいになった。と伝えられています。やがて明治期に入ります。

- 明治4年、御立山は国有林に、百姓山はいろいろの人に、変わります。
- 明治22年、国有林は皇室の財産となります。
- 明治29年、百姓山は御料林として買上げられ、100% (二、〇六、千町歩)が御料林となります。

○ 昭和22年、千頭山林署が管理する国有林となります。

○ 平成11年、関東森林管理局東京事務所静岡森林管理署となり、現在に至っております。

次に千頭森林鉄道について書き綴ります。

明治から昭和の始めまで、千頭山御料林の木材の伐出は水量豊かな寸又川の流水を利用した「川狩」と呼ばれる流送に頼っていました。御料林の地形は急峻で、寸又川の兩岸とも断崖絶壁であつたので、当時としては「川狩」による方法以外には運材の手段がありませんでした。

豊かな水資源は、電源開発の面からも着目され、昭和3年寸又川の水利権を得た等三富士電力(株)(昭和11年富士電力(株)に合併)は御料地内に高堰堤を設けて、一大貯水池をつくり、寸又川の流水量を調節し、水力発電用に供する計画を立て、その許可を静岡県に申請した為果はその支障の有無を帝室林野局に照会してきました。

帝室林野局は、木材搬出の水路がダムで閉ざされれば、木材の流送が出来なくなるので、その水利権の代償として、電力会社が寸又川使用区間に森林鉄道を敷設し、無償で当局に譲渡するならば、工事を認可することも支障ない旨を回答しました。果は電力会社に対し、この条件を付けて認可を与えました。

森林鉄道の敷設は難工事であるが、電力会社は、堰堤構築や水路開削工事に必要な建設資材の運搬にも、森林鉄道によるほかはないものと判断し、帝室林野局の承認を得た設計に基づき、昭和5年10月寸又川上流の湯山・大間発電所の建設認可を待つて、森林鉄道敷設工事に着手しました。

千頭森林鉄道の基幹部分の沢間〜千頭堰堤間(二級線20.4km) 沢間〜千頭間(2.6km)が昭和8年12月に竣工しました。引き続き、大間川線(二級線5.9km)が昭和9年5月に、千頭堰堤から寸又川に沿った延長線(二級線2.6km)が昭和10年8月に竣工しました。こつて千頭山御料林の大動脈が、昭和5年から5年間の歳月をかけて完成し、昭和13年には無償譲渡がされました。

森林鉄道の規格は、軌間76.2cm、軌条10kg、最少曲線半径15m、

最急勾配 $\frac{33}{1000}$ 、建設費100万余円で、軌道敷設費を含めると総額一三三万七千余円であつたといわれています。

なお、沢間〜千頭間は大井川電力(株)の専用軌道となつており、森林鉄道とは軌間が異なるため、三本のレールを敷設し、標準軌間と狭軌間を併用する方法がとられました。無償譲渡後の千頭森林鉄道の起点は沢間とされ、併用区間は乗入れの形をとりました。

森林鉄道により、木材の運搬の形態は、流送から陸送へ大きく変わりました。その後森林鉄道は、大樽・諸の沢・小根沢・大根沢・釜の島柴沢へと延長し、昭和20年当時は総延長47km余となりました。昭和33年に大間川線の延長工事に着手し、37年までに45kmが完成しました。また、逆河内線の新設が大樽を起点として、昭和35年から始まり、37年までに38kmを完成させました。そして、千頭山国有林における森林鉄道の建設は、この逆河内線の昭和37年度をもって、すべて終りを告げたのであります。

昭和12年度実行の「千頭事業区第三次検討施設案説明書」によると、「軌道の敷設によって開発上有利なる条件となれり。茲においてこの運搬施設により、未開発の老齡過熟針瀾混着林又は焼畑跡地の若き雑木の林相整備をなさんとし、第三次検討を行へり」と記述されています。以来、戦争から終戦、戦後の困難な条件を乗り越えて、約77万6千m<sup>3</sup>余が森林鉄道によって搬出されました。

華やかだった森林鉄道の活躍も大きな時代の波にはかなわず、昭和33年栗代林道の着工、昭和35年には大間林道の着工と自動車道の開設に向けて進み始めました。昭和38年には險阻な南赤石山脈を縦断する大規模な構想で、旧中川根町上長尾を起点とする南赤石林道が着工されました。次いで、昭和39年寸又左岸林道の着工となり、森林鉄道から自動車道への切り替えの準備が積み重ねられ、昭和43年4月大間川材の運材を最



後に、千頭森林鉄道は完全にその役割を終えました。

我が家の前を朝晩通過する森林鉄道の警笛を毎日聞いていたという当時の本川根町長松岡敏治さんは、千頭森林鉄道廃止の際に「森林鉄道への惜別」と題して、次の一文を記念誌に寄せています。

深山静寂の空気を振せながら山の男の伐り出すみごとなたたきを運ぶ貨車に、時にはみやまつじ、時には紅葉のくれないがそえられてあった。濃緑の中にもよく光る二条のレール、物言わぬ一本のスパイクにまで働く者の愛情と祈りがこめられたこの森林鉄道を、経営の合理化、近代化のため過去のものとして送るとき、今さらながら限りない愛情の感に打たれる。

かわって、積極的に展開されつつある新しい開発方式が、いつそう地域の発展とわが国経済にじゅうぶんの成果を挙げることとを期待し、初期的開発に大きな役割を果たした森林鉄道と、これによる開発に挺身された方々に、心から感謝の意を捧げたい。

以下は思ひ本の写真集、谷田部英雄さん



厳寒のメカネ隧道



冬場の本谷停車場にて運材貨車の操車



長く連結した列車は、もうすぐ琵琶橋へ

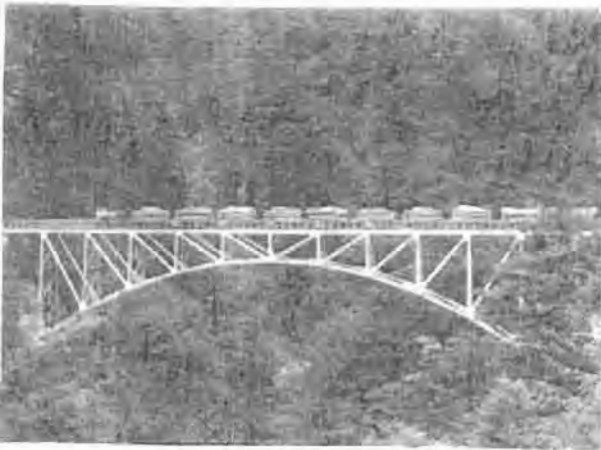


大間停車場（現在の又又温泉プロムナードコース入口付近）



旧琵琶橋の銘板

千頭山、森林鉄道と山奥で働いた人々のあかしより  
複写させていただきました。



右. 初代飛竜橋. 長さ・高さ共に100m  
左. 昭和32年. 2代目飛竜橋.



尾崎政装品事業所. 大間川支線発着所.  
かつては. この地の上部に. 湯山の集落がありました.  
その西端には. 湯山温泉があり. 現在の寸又峡温泉の湯元です.



尾崎政事業所内. 黒松事業地



上西作業地. 左方の盤台へ集積架線へ入った枝  
は. 傍羅へ落すと同時に. 作業軌道へ. 後. 台車へ積込まれる



↑ 貨車への積込  
← 作業





下山列車、1ヶ月振りの下山日。心はもう家族の待つ我が家へ

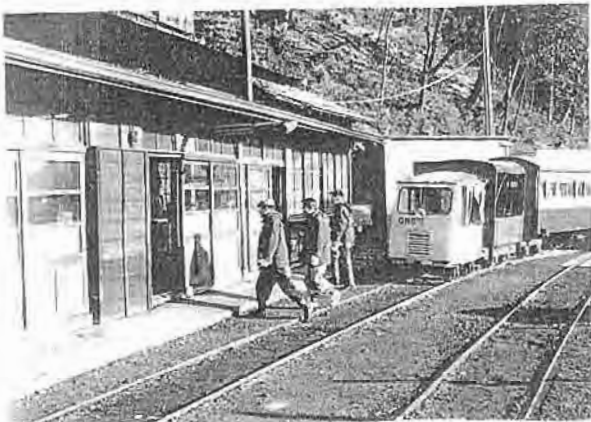


入山列車 何時も夫の安全を願っている妻や子供達との一家団欒を終え、今日から再び厳しい山の現場へ向かう山男達。

千段貯木場遠望



千段貯木場遠望



大井川鉄道貨車にて島田貯木場他へ去発→

↑千段森林鉄道千段駅構内、千段貯木場事務所

↓島田貯木場、大井川左岸、東海パルプ横



島田貯木場、東海道本線大井川鉄橋東側



お茶の話あれこれ . . . その二 . . .

静岡市 石塚 幸男

川柳とくれば、俳句・短歌・小説とくる。たろうが、まず手始めに静岡と緑深い中勘介といこう。中勘介といえは『銀の匙』が代表作だが、実は静岡市羽鳥界隈に材を取った作品も多い。彼の八十年の生涯のうち五年間転地静養のため、羽鳥で過ごしているのである。お茶と羽鳥を詠み込んだ、次のような民謡風の詩がある。

さ月はとりは茶つみのさかり 山は蜜柑の花さかり  
風がさそへば里まで匂ふ はとり娘の香にはほふ  
みんなみな月田植高のさかり 野うは娘の花さかり  
つづやはたちは嫁入りさかり つめやたんぼは蓮華草  
刈れや鎌もつて大麦小麦 恋のひとすぢ天羽根むぎ  
かるは黄金ようゑるは緑 かはい白砂類かむり

「さ月はとり」と題する詩の二節である。のどかな田園風景、茶・みかん、働く娘たち、まるで現代の桃源郷のような村が浮かび上る。中勘介の羽鳥への賛歌と言った人がいる。羽鳥やその付近を詠んだ茶の短歌と俳句を挙げてみよう。

薬科や若葉かよふ初夏の

はとりはうれし新茶のかをり  
粉をまき茶つみ麦かり初夏の  
はとりはせはしお庭おる音  
奥ふかく暗き家並みつばくらめ  
さ月茶町は焙炉のかをり  
山里は茶の花咲きぬ露ながら  
さびしき人の魂にそなへん  
わがうゑし芽はえ茶の花さきにけり

あらかはいお茶のこの花

一首目「薬科や」は、五月の陽光ふりそそぎ、新茶の香りが歌から漂ってくる。

二首目「粉をまき」は、のどかな中にもいそいそと働く羽鳥の人々が生き生きと描かれている。

四首目「山里」は二首めとは対照的なさびしい風景である。俳句では「茶の花」は冬の季語である。

五首目「わがうゑし」は、中勘介も「茶の木」を植えたであろう。まるでわが子のように慈しんでいる。

俳句ではどうだろう。

桐の花茶つみの人も眠げなり  
若葉して命めでたき新茶かな  
琴の音もそふや手越の茶つみ唄

中勘介は、その随筆に太平洋戦争前後のあの暗い世相にあつて羽鳥生活だけを「熱砂の中のオアシス」と記している。まさしく「オアシス」の言葉が輝いている。

★ ★ ★ ★ ★

それでは小説ではお茶かどのように使われているだろうか。大宰治の『晩年』に次の一節がある。

生活、よい仕事をしたあとで一杯の茶を啜る。お茶のあふくにきれいなきれいな私の顔がいくつもいくつも映っているのさ。どうにかなる。

まさに「どうにかなる」気分になる一節だ。

私がかつて『生活』を奏でる茶(第一法規出版)なる本を執筆したことがある。第四章の「小説の中に現れた茶」に、茶は小説の中でどんな役割を果しているか、という箇所がある。

いろいろの小説を取り上げた中で『氷壁』(井上靖)がある。本項では、『生活』を奏でる茶で取り上げなかった部分を分析してみよう。

まず『氷壁』を思い返してみる。この作品は、昭和三十一年十月から三十二年八月まで朝日新聞に連載された。実際当時あったナイロンザイル切斷転落死という事件を踏まえて、発表後社会的反響を呼び、登山ブームを起こした。

—あらすじ—

魚津恭太と小坂乙彦は学生時代からの山友達。三十歳を越した今も一緒に登山する親友だ。小坂は、ナイロンザイルを製造する会社の重役、代教之介(五十七歳)の二十七歳も年下の美しい妻美那子と不倫関係にある。しかし、美那子は一度だけの小坂との間違いを悔やんで、小坂を避けている。小坂は美那子を忘れられず、離婚して自分との結婚を望んでいる。魚津は中に立つて、小坂に美那子への思いを断ち切れ、と助言する。美那子の夫教之介は、二人の中を分らないながら、なんとなく違和感を持っている。

一方小坂の思いは暮るばかり。そして美那子を穂高の東壁に立たせたいとさえ思っている。そんな折、魚津と小坂は真冬の穂高に挑んだ。そして二人を結んだザイルが切れ、小坂は転落死する。

絶対切れないというナイロンザイルの事故だけに、小坂の自殺説、魚津の策謀説などが流布され、世間の注視の中で、製造会社で切斷時と同じ条件に近い設備でザイルの公開実験をする。担当は教之介。結果は、ザイルは切れなかった。魚津の立場は悪くなる。

でも、彼の上司常盤大作は、豪快な言動の中に、繊細さを秘めてなにくれと魚津を弁護してくれる。

魚津は、小坂の死体捜索に出て発見、ザイルは切れていた。それで魚津の立場は策謀説に傾き、いよいよ悪くなる。魚津を信ずる小坂の妹かおるは、魚津を愛し、将来の夫と心に決めていた。そして、求婚する。

一方魚津は、行余曲折の末、美那子に惹かれるようになり、美那子も魚津に惹かれるようになるが、結局かおるの愛を受け入れた魚津は心をきめるべく、美那子への愛を断ち切るべく、単身北アルプスに登る。徳沢小屋で待つかおるの目前にして、美那子の幻影に惹かれるようにして、前進すれば命を失いかねない危険な滝谷を目指して落石に打たれて死ぬ。

以上があらすじであるが、なにしろ長編なので、こまかいところはともとも伝えきれない。

さて、『氷壁』には飲み物が数種類登場する。茶、コーヒー、紅茶、酒、水である。これらの登場する場面をざっと数えてみた(頻度ではなく)。茶が約十場面、コーヒー・紅茶が約九場面、酒が四場面、水が二場面である。サラリーマン小説の色合いもある本作品だから、これら飲料の登場は納得できる。

まず、酒について紹介してみよう。  
小坂と美那子が不倫する場面だ。

二人は銀座へ出て、レストランで食事した。酒も少し飲んで多少赤い顔をしていたが、酔っていたというほどではなかった。略—物すごいウリスマスの人出の中で歩いていくうちに、美那子はいつか正常の美那子ではなくなって行ったのだ。それまでは小坂にそうした気持ちも一度でも感じたことはなかったのだが、



その時は妙に小坂から離れられない気持ちになつたのである。

『もつとお酒を飲んでみましようか』

そう言ったのは美那子の方だった。——略——が、これが結局は間違ひのもつたのである。十時ころ、家へ帰るつもりで自動車に乗ったが、その時、美那子は生まれて初めて何杯かすこ——洋酒で酔つていた。——略——

(そこは)一応ちゃんと体裁を整えた小さいホテルの前だった。その一室にはいつた時、彼女をそこへ休ませて帰ろうとした小坂乙彦を引きとめたのは美那子の方だった。このことも、美那子ははつきり覚えてゐる。

そして、唇を合わせたのと、ベッドに倒れたのは、どちらか積極的だったとも言えない。その時、二人の心と体とは、同時にそれぞれを求めていたのである。——略——

美那子は汚辱と、悔恨と、罪の意識にまみれて、そのホテルを出た。——略——美那子はそこで小坂と別れて、一人で電柱の陰に立ってタクシーを待った。体も心も冷え込んでいた。

読者諸氏よ！ここまで披露したり、もはや説明不要であらう。「酒」は二人の特に美那子の理性を失わせていることは論を俵たない。余計なことかもしれないが、「女を口説くのにはまずアルコ——ル」という言葉があるが、まことに由無(ゆな)いことではないと思われ。

世の女性諸君よ、イケメンから、甘い言葉で「お酒」を勧められたい、くれぐれも注意されたし……。「何？待ってるんだって！ああ、怖(おそ)い、世の中変わったなあ！」

そろそろお茶の出番だ。教之介美那子は、カメラ会社の社長令嬢の結婚披露宴に出席したあと帰宅したシーンである。

「田園調布の家へ着くと、教之介はモトニング姿のまま、応接室へはいつて行って、ソファの上へ腰を降ろすと、

『まず、濃いお茶をもらおうか』と言つた。いかにも疲れたといった顔付きだった。美那子は夫へお茶を運ぶように春枝に命じると、自分は居間に行つて、コートを脱ぎ、——略——

『すぐにお風呂におはりに入りましたら』  
『そうしよう。今日はなかなか盛会だったじゃないか。花嫁もきれいだつた！あれで幾つくらいか』

『さあ』  
『婚期も逸したつて、両親はずいぶん心配していらしい。二十七、八』  
『そんなし。どんなに多くても、二十五でしよう。二十八』

『そりや、そうだな』教之介は言つて、要らんことを言つたといつた。ちやうど眩(くら)いような顔をした。そして春枝の持つて来た大ぶりの湯飲茶碗で、ゆっくり茶を飲み終わると、ネウタイを解きながら立ち上がった。』

夫婦のなげない会話に登場する「お茶」。よくある情景である日常の茶だ。

鎮静の具とはいえ、お茶が一筋縄ではいかない微妙な役目を帯びて作品に見えつ隠れつする場面がある。それは吉兆の知らせと言われる「茶柱」の登場である。そもそも「茶柱」は、めつたに立たないことか、また「柱」は、一家を支える「柱」を想像させることから、めでたいとされてきたのだと言われている。

教之介と美那子夫婦の日常的な会話。美那子は小坂と不倫したという負い目を抱いているが、教之介はなんの疑惑

も抱いていない。しかし、若く、美しい妻には、微妙に引け目を感じてはいる。

「美那子は急いで縁側から上がった。台所との間にある廊下へ出ると、そこで、（中略）」

と、二階へ聞こえるくういの返事をしておいて、そのまま台所にはいり、そこで番茶を大ぶりの湯飲茶碗に入れた。教之介は茶が好きで、一家に居る時は、美那子は何回となく二階の書斎へ茶を運ばなければならぬ。それも煎茶の濃いのである。よくもこんな濃いのが飲めるものだと思うくらい濃いといれぬと気に入らない。しかし、今の場合は番茶である。朝食前だけはさすがに煎茶はきつすぎると見えて番茶を飲んでゐる。番茶でない時はこんぶ茶である。（略）階段を上りきり、左へ行くと夫の書斎の扉に突き当たり、美那子は階段をもう二、三段で上りきるところで、ちよっと立ち停まって、茶碗の内部を上からのぞいた。大きな茶柱が一本立っている。

美那子は茶碗から茶柱を除くには、階段の突き当たりの硝子窓を開け、そこから内容物の一部をこぼせばいいことは知っていた。それよりもっと簡単にそれを除去する方法のあることを知っていた。とっさに美那子は右手の親指と中指をそろえろと、それで茶碗の中の液体の表面から一本の茶柱をつまみ出した。

ここで美那子はなぜ昔の「茶柱」をつまみ出したのか。ただ単に邪魔物として取り出したか、微妙なところだ。普通の夫婦なら茶柱の立ったまま、「あなた、茶柱よ」と夫にいうのが常ではないか。何かそうさせないものが、美那子の胸中にひそんでゐるようだが、しかし、それはもともとやめて、キョウちゃんとした形をまた取ってはいない。

続けてみる。

「美那子はぬれた指先を白い前掛けでふくと階段を上り、洋室に上っている夫の書斎へとはいって行った。」

「お茶でしよう？」（夫の背に美那子は声をかけた。）

「教之介はゆっくり振り返ると、」

「今朝は霜が降りてないかい」とおだやかな口調で言った。

「さあ、一見してみましようか。」

「わざわざ見るには及ばんよ。」

教之介は笑った。なんでもなく言ったのに、美那子がすぐ真面目に受けたことか、おかしくもあり、またそんな妻の稚さに満足でもあるといった風であった。

「お茶、ここに置きますわよ。」

美那子は湯飲み茶碗を部屋の中央に陣取っている大きな机の端に置いた。

「トマトジュースが欲しかったんだ。」

「あらお茶じゃありませんの。」

「お茶でもいい。」

「じゃ、持って参りますわ。トマトジュース。」

「いいよ、お茶で。」（それにもう朝食だろ、う。）

「ええ。」（でも、また十分からはかかりませうかし、う。）

教之介が机の上の茶碗を取り上げたので、お茶で我慢してもらうことにして、美那子は書斎を退ろうとした。

「少し葱臭いな。このお茶。」

その声で、美那子ははっと振り向いた。

「においますか？」

「うん。」

「かえて来ましよう。」

『いや、よろしい』 教之介はひと口飲んでから、  
『指に葱のにおいがついていたんだ』と言った。  
『そうかしら』

あいまいに美那子は言った。——もしかすると、書齋が半開き  
になっていたので、自分が指で茶柱をつまみ出したことを見られ  
たかも知れないと思った。どうもそうらしいという気がする。

『見てらした？』  
『何を』

『じゃ、いいんです』

美那子は悪戯をとかめられた子供の表情で笑って言った。  
教之介の方はそんな美那子を何とも思わない風で、

『折角の日曜だけ、今日も出なければならぬ』  
と話題を転じると、また茶をすすった。

この場面で見ると、美那子は首をすくめて夫に甘える  
若い妻であるし、教之介も妻の『稚さに満足』しているよ  
うだ。  
しかし、美那子の胸中に、この「茶柱」が大きなのしかかる  
ようになっているのである。

—— その二は、ここまで ——

次号は八代夫婦の微妙な心理に注目してもらいたい。

夏も近づくハハ夜 野にも山にも若葉が茂る

あれに見ゆるは茶摘みじゃないか

茜櫻に菅の笠



はるかなる山なみより

川根町 又 平 修

「人生は人と人との出会いである」という。私は小・中学校  
青年学校、そして社会教育、児童館、そして老人会と、奇  
しくも多くの方々と共に活動し、学び、喜び、苦しみ、そして私  
なりに悔いなく八十数年を過ごすことが出来たと思つくと  
これらの人々との出会いが奇しく縁といえます。

私はここで様々な出会いと体験を書きはじめます。  
まず、書物との本会いから。——

たしか、昭和十八年の戦時一色の時代だったと思つた。たまた  
まゲーテの「ファウスト」を手にする事が出来た。当時としては  
珍しく横書きの白表紙であった。いつ朽ち果てるか、知れな  
い時代でもあり、私なりに読んでおきたいと思つた。

それは詩戯曲の形式で書かれてあった。何日かかかって、  
その第一部から「人間は努力する限り悩むものだ」という  
ことと、第二部からは「自由と生活は日々これを獲得するも  
のにして、はじめて味あう権利がある」という内容を読みと  
ることができた。

### 学 徒 動 員

昭和十八年末、学徒動員で日本通運に動員され、二ヵ月荷  
物の運搬に明け暮れた。

私たち学徒動員の仕事として荷物を配達する場所は、  
銀座から日本橋、神田へ、リヤカーをひいて回った。雨の日など  
は蓑笠でリヤカーをひき、それで平気で喫茶店へ入って、  
コーヒーを飲んだりした。日本銀行にお金の交換に行つたと



きなど、どうしたことか警察官に審問され、学生証を見せてその場はことなく終わった。が、人は服装で判断されがちだ、と知らされた。

又、運搬する荷物の中から穀物や野菜等を横取りして、自分の袋形の前掛けに入れるのを見て啞然とした。すぐ、その場で注意すると「俺ばかりじゃないぜ」と怒鳴り返し、どこかへ行ってしまった。主任にそのことを話すと、「ありかとう。よく注意してくれましてね、やはり学生さんだね。僕からも今後そんなことのないよう注意しておくれよ。ありがとう」と言いながら困った顔をしていた。

それから間もなく白通の仕事は解除となり、私は住友電気(現在のNEC)の大型真空管工技課(現場の研究の課)へ配属された。学徒動員だったのが、月六十円を支給された。大学生は七十円、中学生は三十円であったと聞く。

最初に与えられた仕事は、現場のガス使用量のチェックであった。現場ではバルブを作るほかに公然と内職が行われていた。その防止として学生にやらせたのであろう。この仕事は一週間で終了し、大型真空管を飛行機で運ぶ箱を考案する任務に就いた。その当時、飛行機から落下傘で真空管を落とすと、八〇%は破損したということである。

この課題について、横の机で製図をしながら聞いていた丁大学の学生が、「君は、いいテーマを与えられたね。僕が思うに大型真空管を箱に入れ、それを四方からバネでつる。そのバネの強さをどれほどにするか、バネの手だと思おう。しつかりやりたまえ」と励ましてくれた。

その仕事に取りかかったが、はじめは真空管があとかたもなく壊れてしまった。現場からさんさん文句を言われ、それから真空管の不良品で勝負し続けた。真空管が壊れなくなるまで三週間はどかかった。次に、真空管の内部の機能が壊れないためには、また一週間は要した。真空管をかこむバネの強さを図面に

書いて主任に提出した。主任は、「出来たか、有り難う」と言ってくちを握ってきた。よほどうれしかったにちがいない。

次に短波送信機の修理、それから、次のテーマはジルコン(木炭のような粉末)を真空管のプレートに焼き付け、フィラメントから発生するガスをこのジルコンが吸いとり、そのことでフィラメントの寿命を出来るだけもたせたいというものであった。これはドイツから特許を買いとり、研究所で進めてきたが、未だ完成しなかった。この度の仕事はN工専の丁君との共同研究であった。

早速研究所に行つて研究の手ほどきをうけた。こちらは、学生ということもあつて気楽に今までの成果について話してくれた。私達二人は一部始終をノートに書きとめ工場に戻つた。この頃は、敵機の来襲があり、研究も思うように進まなかつた。それに相手の丁君は肺を侵されていて、研究にあきやすく途中で休むこともあつた。

そんな時、工技課の庶務の事務員から呼びとめられ、「あなたは、素晴らしいことをなされたのね。あなたの研究が、陸軍省と海軍省から認められ奨励賞がでて、よかつたね。あなたも戴いたでしょう」と言う。はじめは奨励賞や賞金のことを聞いたが、私のところへは何もなかつた。そして会社でも異動があつた。私の直属の主任はいつの間にか係長になつて、新しい主任が来た。我が強い中年男で、よく研究の進め方で口争いがたえなかつた。そして、そのジルコンによってか、いつの間にか自分の肺が侵されようとは思つてもいなかつた。

十九年の十月、工場の検診の折、肺に少し異常があるとのことだつた。余り気にしていなかつた。その頃は、女子挺身隊が配属されて、直接ジルコンにふれなくてもよくなつていた。研究も順調に進んで研究所より早く、ジルコンをプレートに焼き

付ける作業が完成に近づいていた。

十二月も押し迫った三十日、妹が、二日徹夜して手に入れたという東海道線のキップを持ってきた。取り敢えず帰宅するようにとのことだった。気がかりの仕事も順調に進んでいる時だったので、帰郷することにした。父のすすめで、地元の医者、診察を受け、たところ、肺が少し侵されているということで、三ヶ月休養すべきとの診察がおりた。そのようなことから、動員の場所を神奈川の住友電気から、地元の日本発送電、大井川電力所へ無理に異動した。仕事は弱電から強電に変わったので、とまどう日々であった。

### 召集から復員まで

二十年六月に入って突然召集令状がきた。入隊後の任務は九州縦断のケーブル設置の命令であった。夜となく昼となく米軍のロッキートの銃撃にみまわれた。

八月になって広島、長崎へ新型爆弾(原子爆弾)。その時、佐賀と福岡の果境にいたが、爆弾の勦撃を体感したように思った。

部隊は、人吉(熊本県)から福岡までの通信ケーブルをほるの任務であったが、人吉へ出発する前日に終戦となった。が、八月十五日から九月十三日まで、戦争中よりも厳しい訓練……四時三十分起床、全員十キロの行程を駆け足の毎日であった。

九月に入って間もなく、馬に乗った兵隊が荷物と山ほどこに積んで、悠々と来るのには驚いた。「どうしたんですか」と聞くと、「日本は負けたんや。銃は溝へ捨ててきた。ほしいものだけもらって家に帰る」という。「この部隊はどうなっているんだらう……」と思つたが、二、三日して部隊からの呼び出し、急ぎ足で戻るあの兵士を見て哀れにも思えた。

このようは、とだけではなかつた。小隊長室で留守番をし

ていると、事務室の軍曹が出て来て、「お前、なにしているんや」と血相をかえてどなりつけた。「留守番をしています」と起立して答えると、「内務班へ帰れ、俺がみてやる」ということで班へ帰った。夕方、小隊長から呼び出しがきた。

小隊長が、「俺の飯盒を知らんか」という。「存じません。軍曹殿が『内務班へ行け』というので班へ帰ったので……」と言うと、「そうか、軍曹を呼べ」というので、軍曹を呼んでくる。軍曹は、来るなり「お前が盗んだんじゃないか」と、どなりつけてきた。聞き直して、「そりや、軍曹殿じゃないですか」と大声で言うといきなりびんたをくらうって横転した。「こんな侮辱を受けたのは、はじめてだ」と、馬のりになって二発、三発くらった。私はヤレるままに軍曹の眼光を睨みつけた。小隊長は見かねて「よし解った。おい、馬乗りはよせ」と、仲裁に入った。もし、このようなことが戦争中であつたらう、私は学倉行きだったなど、薄笑いをした。

翌日、部隊全体非常召集で外へ出して、私と軍曹二人で飯盒を探したが見当たらなかつた。誰かが外へ持ち出したか、軍曹が隠したか、また、小隊長の思いつきであつたか、と、わからずじまいだった。驚くことは、それはかりではなかつた。当の小隊長が、軍の衣料を独り占めしようと、佐賀の親戚の家に夜間新兵に運ばせたことだ。たまたま午後小隊長室に行くと、二三人で衣料をダンボールに詰め込んでいた。何も知らない私は、その員数を書き留めようと申し出た。小隊長は「ややとまどった顔を」した。「そうしてもらえば助かる」と承諾した。その記録は私のポケットに入れられた。

それから二、三日たつた夕方、下士官室がさわがしかった。何だ、ろうと立ち寄ると、小隊長室で働いていた新兵が、数人の下士官にとり囲まれて折檻され、とまどつていた。「おい、お

前も小隊長室に居たは。小隊長が夜料をどこかへ運んだというが、お前知ってる。たろう」と睨めつけた。私は即座に「小隊長が夜料をダンボールにつめさせているのは知っていますか？」と言いかけると、「おお、そうか。じゃあ、夜料の員数を知ってるか」「私がその員数を書いたのを持っていましたか、どうしたかはつきりしません」と言うと、下士官達は目を丸くして喜んで、「おい、それを探して来い」と急がすので、私は急いで厠へ走った。実は、ポケットの中にあつたのだが、——あからさまにした時、小隊長を裏切ることになる。しかし、横流しした小隊長は風上におけない——とも思えてきた。

どの位、厠にいたのたろう。結論は員数を書いた紙を出すことにした。下士官達は小躍りして喜んだ。今まで推測の段階であつたが、証拠が出た。下士官達が折檻していた初年兵は、馬鹿なのか、突直で義理堅い男であつたのか、やくざの一味だつたのか、わからぬ、不思議な若者だつた。下士官達は、私の肩をたたりて「よくやった、よくやった。それじゃ内務班へ帰れ」。内務班へ帰る途中、小隊長を裏切つた、と対して呵責の念にかられた。

翌日、小隊長に会つた時、思いがけず近づいてきて、手を握って「有り難う」と言い、私の目を見つめた。私はとまどつたが、強く手を握りかえした。小隊長は自分の不正行為に対して目覚めたのか、と安堵した。しかし、そんな甘いものではなかつた。私が記録した夜料の員数は、その一部にすぎなかつたから。小隊長は、正義感に燃える下士官も、私も裏切つたのである。この小賢しい人に、世間はそう甘いものばかり続くものではないと思えてきた。

復員(軍隊から解除されて帰宅すること)になる前日、班長から最後の訓辞があつた。「明日から、新しい生活が始まる。今までと一八口度違つた生活になる。何も見本はない。自分自身

昭和43年9月10日発行 (4) な か か わ ね 報 告

の納得する生き方をまっしぐらに進めることだ。このことが、よくはつた戦友へ報いる道だ。今度再会する時のお互いの課題だぞ。頑張ろうじゃないか。そして金だけは気をつけろ」。短い訓辞であつたが、重いもの、かすしりのしかかつてきた。この班長の言葉が、私のこれからの生き方への大きな指針となつた。

昭和二十年九月十五日、復員。家に着くと八十歳の父が手を高々と取りて迎えてくれた。兄は未だ帰っておらず、台湾にいらるといふことだつた。——次号に続く——

読売教育賞を受賞

中学校の又平先生の 英語指導の研究で

中川根中学校の又平修先生は、はさる七月、英語教育の研究実績に対して読売教育賞(優秀賞)を受賞されました。

又平先生は英語を教える場合、単に読む、書くだけでなく、テープ・レコーダーや単語カードを使って、目、耳に訴えるという方法をとり、この研究が実つて、県下でただ一人優秀賞を贈られたものです。

中学生にとって、はじめて接する英語は、文型を覚えるのがひと苦勞で、にが手の学科の一つになっています。このため同先生は、この語と文型をどのように指導したらよいかと考へ、教科書に出てくる約千五百語のうち基本的で運用度の高い千語を選定、文型も具体的な英文を選び、指導の徹底をはかることにしました。効率的な指導法として①自主的学習態様をつくる②入門期の指導は細心に計画す

る③授業の中で、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことを通じ、語をどのように示し、指導するかを考へる④文型指導では、その状態を重んじ、すでに学んだ文型を大切にす⑤視聴覚教具を十二分に活用する、などに着眼、これらを授業の中で生かすことにしました。物語の場合、絵を見せ文型の展開されている状況をのみ込ませ、テープ・レコーダーを使って発音を覚えさせるなど読む、書く授業でなく、目、耳に訴えて、授業時間中につか二つの文型

を教え込むようにしました。このような指導方法をとるようになってから、生徒の理解が早くなり、教科も格段と進むようになったというところで、又平先生は「授業が時間きりのものに終らず、次の時間の学習に生かされ、またさらに家庭での学習につながるというように指導の流れを大切にしたい。また勉強のふんいきのもとになるのは先生であり、先生の特徴を生かして勉強に意欲を燃えさせたせるふんいきを作りたい。学習の面では一般にきびしさに欠けるうらみがやっつていきたい」と語っています。

昭和57年10月21日発行  
中川根町20周年記念  
広報なかわね縮刷版より





(英 語 授 業 中 の 又 平 先 生)

又平修さんの、はるかなる山なみも皆さんにお届けする経緯を申し上げます。

何年か前に、私のもとに、「川口發電所水利権期日(昭和六四年三月三十一日)平成元年)を迎え大井川に水を取り戻す住民運動の記録」が送られてきました。

今年になって調べ物があり「広報なかかわね縮刷版」を出めがねで見えていました。すると、前ページの「中学校の又平先生 読売教育賞を受賞」の記事が目に入ってきました。

この方は以前水返せ運動の記録を送って下さった方だ。記事のコピーと、ふる里通信92号を送ってみようかと一ヶ月ほど前に送ってみました。

そーたり、期せずしてお札の手紙と、はるかなる山なみの冊子のコピーが届きました。私が一人が見るには、もったいないものです。今回は「学徒動員」召集から復員まで」を載せさせていただきますました。どうぞご覧下さい。

又平さんは川根地域の小学校の教師として、長年教鞭をとられた方です。東川根中学・大井中学・中川根中学・川根中学・下長尾小学校など、幅広い校名の学校の先生。本川根北小学校の校長を最後に退職されその後、地元の川根町五家山児童館長や老人クラブ百寿会会長もされ、教育界や地域リーダーの道を進んでこられた方です。米寿を迎えるこの頃、ウォーキングやグラントゴルフを楽しまれております。

### また、春がやって来ました

東日本大震災から一ヶ年の時が流れました。皆さんそれぞれに心に大きな重みを背負った一年、そして将来となることでしょうか、何とか頑張って持ちこたえていきましよう。それにしても地震のエネルギーのすごさには、数息するばかりですが、いざという時を考えて、一人一人が命がたすかる方法を身に付けて行かなければならないな、と思つた次第です。――災害に対する準備を――

君の国はと聞かれた時に、僕らそろって元気に叫ぶ、愛と勇気を教えて聞く桜、桜、桜の花咲く日本の国よ。



いつになく寒く厳しい冬でしたが、四月になってようやく、春がやって来ました。梅やモクレンやサニシユウなど早春の花々も咲くのがおくれ、梅も桃も桜も一斉に咲きとても美しい風景です。ふる里の山々は、杉、松の森林が多いのです。谷すし、悪場などには雑木林があり、季節の変わりを楽しませてくれます。特に山桜は山の麓から山頂に向かふ段々姿を見せ、とても見事です。

奥山を色どる、ミツバツツジ・アカヤシオ・アセビ、なども遅れていますが、必ず咲いてくれると思います。この便りの届く、ゴールデンウィークあたりが見ごろでしょうか。是非足をばこんで見て下さい。その頃には新茶の摘みとりも始まることでしょう。昨年は、全国茶品評会で素晴らしい成績を残しました。こゝしも、川根茶産地が健やかで、良質の茶をお届け出来るように掛けたいと思います。

# 5月21日(月)朝、日本各地で日食が見られます 特に、静岡・横浜・東京は金環日食の中心です。

久々の大型天体ショーです。  
ご覧下さい。好天を祈願しましょう。  
太陽の見かけの大きさが新月より少し大きいため、真っ黒な新月のまわりに太陽がリング状にほみ出して見える「金環日食」となります。そのめずらしい金環日食が、早朝ですが各地で見られます。ふる里も金環食帯につまれます。



## 仙台

食分0.929  
日食始：6時24分  
日食最大：7時40分  
日食終：9時09分

## 宇都宮

日食始：6時21分  
金環食始：7時34分  
金環食最大：7時36分  
金環食終：7時38分  
日食終：9時05分

## 横浜

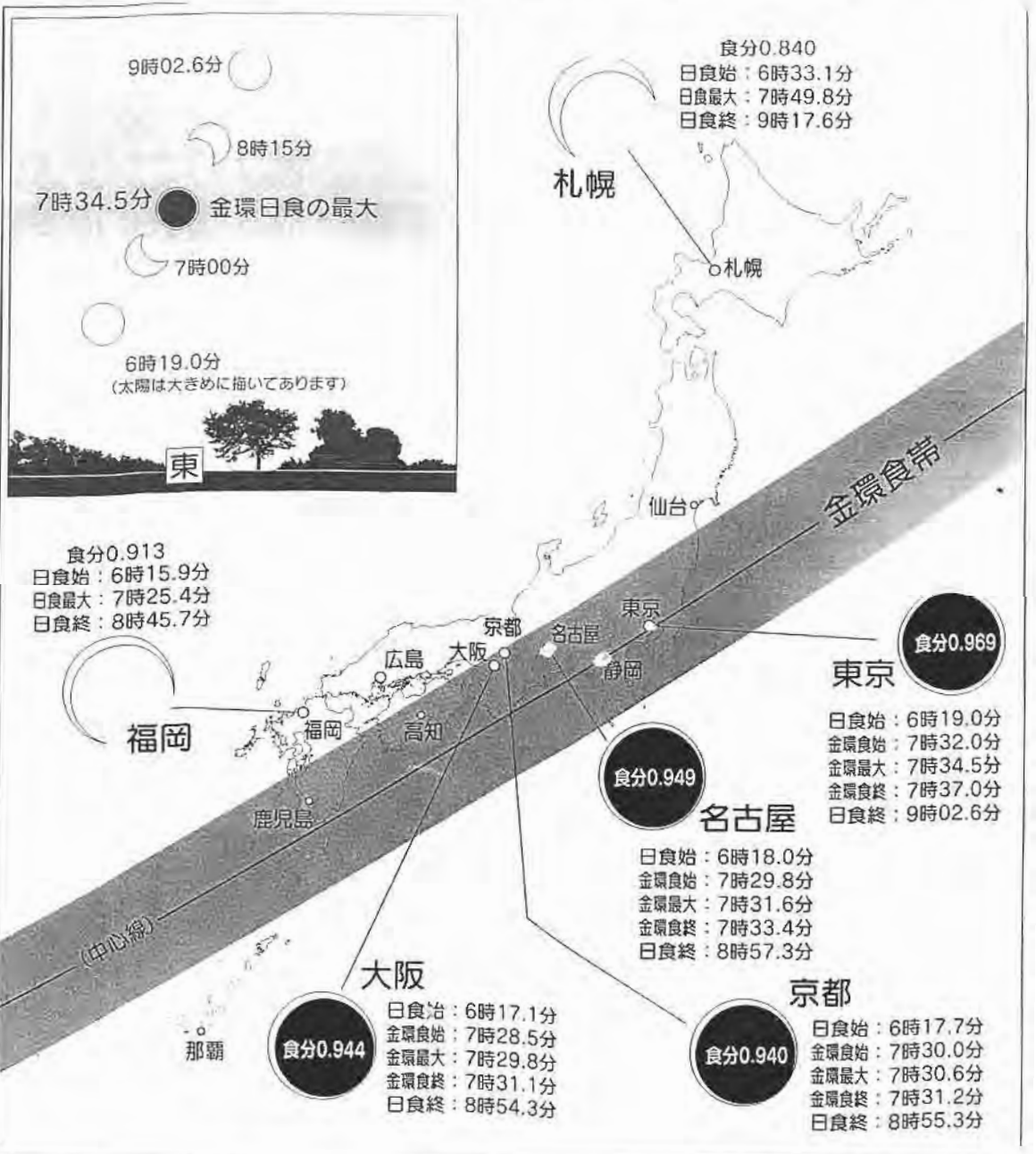
日食始：6時19分  
金環食始：7時32分  
金環食最大：7時34分  
金環食終：7時37分  
日食終：9時02分

## 静岡

日食始：6時18分  
金環食始：7時30分  
金環食最大：7時32分  
金環食終：7時35分  
日食終：8時59分

## 注意

この日食を見るには「日食メガネ」をつけて下さい。目を焼く事故がない様にして下さい。又、虫メガネ、双眼鏡、カメラ(望遠)など使用しないで下さい。危険です。



食分0.840  
日食始：6時33.1分  
日食最大：7時49.8分  
日食終：9時17.6分

食分0.913  
日食始：6時15.9分  
日食最大：7時25.4分  
日食終：8時45.7分

食分0.969  
日食始：6時19.0分  
金環食始：7時32.0分  
金環食最大：7時34.5分  
金環食終：7時37.0分  
日食終：9時02.6分

食分0.949  
日食始：6時18.0分  
金環食始：7時29.8分  
金環食最大：7時31.6分  
金環食終：7時33.4分  
日食終：8時57.3分

食分0.944  
日食始：6時17.1分  
金環食始：7時28.5分  
金環食最大：7時29.8分  
金環食終：7時31.1分  
日食終：8時54.3分

食分0.940  
日食始：6時17.7分  
金環食始：7時30.0分  
金環食最大：7時30.6分  
金環食終：7時31.2分  
日食終：8時55.3分

定期購読のお願い

ふる里通信は有料発行です。  
1部送料込 300円

皆様の定期購読が、この通信の発行をささえます。年間4回の発行を目指しております。そして目標は100号です。

はじめて読まれる方も、購読が切れた方には郵便振替用紙を同封します。会員になっていただいたり、引き続きご覧いただければ嬉しいです。

1回1回のご送金は大変ですから1年分1,200円をご利用下さい。よろしくお願ひします。

発行責任者 〒428-0313

静岡県榛原郡川根本町上長尾 859-6

小澤 節子

TEL 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020

郵便振替口座 00870-4-81556

今号にてふる里紹介、上長尾地区と川根地域に移り住んで来た人々など、発信を計画致しましたが、資料など、発行不十分にて、次回にまわさせて頂いたまます。よろしくお願ひします。又川根本町の文化財を取りまとめましたら、素晴らしい宝物が多くあることが、実感致しました。今号は「徳山の盆踊」をとお届けしました。次号は「田代神楽」をお届けしたいと思ひます。楽しみにお待ち下さい。

ふる里通信をご覧いただいている皆様、92号では大変ご無理なお願ひを申し上げました。値上げ、カンパ、本当に苦しいお願ひを致しました。皆様によく応じて下さいます。本当にありがとうございます。お陰様で、発行の目度が出来ました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございます。また、又はげきのお言葉もいただきました。元気を沢山いただきました。日々精進して、ふる里通信を発刊したいと思ひます。今後共よろしくお願ひ申し上げます。



今号「千頭山国有林と森林鉄道」にて載せた写真は、谷田部英雄さんの右写真の冊子からいただきました。谷田部さんは千頭山林署に四度勤務された方で、「千頭山がたり」千頭山小史に続く三冊目の出版、いづれもすばらしい学術書です。

**千頭山**

森林鉄道と 山奥で働いた人々のあかし

過日テレビで、松本清張原作「ある市長の死」と題した推理番組がありました。内容はともかく、列車の中、駅、町並み、温泉宿など、見おぼえのあるシーンが続きました。大井川鉄道、電車周辺の風景、千頭駅、千頭町の街並、そして寸又峡温泉と次々出て来ました。主人公の反町氏も、ロケーションに来たんだなあ——見とけばよかったです。なんて思いました。ご覧になられた方も、気が付かれたのではないでしょう。大井川鉄道も、それ以外の電車や駅もテレビに登場する身が多くなり、ました。殺人事件ばかりだと、気もはずみずみですが、けっこういい撮影スポットになっているふる里です。

